

平成 21 年度 臨床実習指導者研修会の実践報告 —前年度の修了者との協働—

Workshop report 2009 on the clinical nursing instructors

水野照美, 橋本佳美, 宮崎紀枝, 吉岡恵, 清水千恵, 小村三千代

Terumi Mizuno, Yoshimi Hashimoto, Toshie Miyazaki
Megumi Yoshioka, Chie Shimizu, Michiyo Komura

キーワード：臨床実習, 臨床実習, 臨床実習指導者, 研修会, 協働

Key words : clinical practicum, clinical instructor, workshop, collaboration

要旨

看護教育における実習の位置づけを理解し、効果的な実習指導の方法を学ぶことを目的に、本学部は、講義と演習を組み合わせた3日間の臨床実習指導者研修会を、受講者50名を対象に実施した。演習の部分は、演習用事例の作成・演習運営において前回の修了者3名と協働した。この実施経過を評価し、今後の課題を明らかにした。受講者は、【指導方法のとらえ直し】【大切な点の再確認】【自然体の指導姿勢】【話し合うことでの成果】に気づくことができ、研修内容および方法、修了者との協働に対して高く評価した。今後は、受講者同士の自由で率直な話し合いを継続し、修了者とのやりとりを増すプログラム検討が課題と考えられる。

I. はじめに

平成20年に開設された本学は、初年度に施設の依頼を受けて、臨床実習指導者研修会(小村, 2009)を実施し平成21年に二回目の研修会を開催した。この時点では、見学主体の実習である基礎看護学実習Ⅰが2学年分行われたが、受持ちによる実習である基礎看護学実習Ⅱはまだ開講されていない。このため、実習施設の臨床実習指導者は、大学生の受け

持ち実習の指導を経験していない状況にある。

さらに、受講者は、これから指導役割を担う立場であるため、過去に実習指導を通じた教員とのかかわりがほとんどない。しかし、看護基礎教育における臨床実習の役割は大きく、臨床実習にかかわる教員と臨床実習指導者の互いの協力が不可欠である。

そこで、今回は二点変更をした。一点目は、前回の研修修了者3名と、演習の事例作成および演習運営を協働して行ったことであり、

二点目が、実習でかかわる複数施設の看護師を対象としたことである。この実施経過を評価し、今後の課題を明らかにする。

Ⅱ. 研修会の概要

1. 目的と目標

初年度と同様、「看護教育における実習の位置づけを理解し、効果的な実習指導の方法を学ぶ」ことを目的とした。目標は、①看護についての視野を広め、自己の看護観を深めることができる、②実習指導者の役割および指導方法を学び、活用方法が理解できる、③学生の特徴やレディネスに関して学び、応用方法が理解できる、である。

2. 研修会のプログラム

研修会は12月上旬の連続した三日間で実施した。また、会場は、昨年同様、普段の大学生の様子を見て学生理解のヒントにするため、大学構内とした。

プログラムは、昨年度の評価を受けてほぼ同じ構成とし、午前には講義（60分）、午後には演習（180分）を配置した。1日目は「看護観」を主題とし、講義「看護を語るとは」「私の看護観」、および演習1「看護する上で大切にしていること」を実施した。2日目は

「指導観」を主題に、講義「看護学部の臨地実習の概要」「臨地実習における指導者の役割」「効果的な実習指導の方法」、および演習2「指導する上で大切にしたいこと」を行った。3日目は、「学習者観」を主題に、講義「青年期の心理的な特徴」「本学学生の特徴および傾向」「学生のレディネスの捉え方」、および演習3「学生の力を引き出すために」を実施した。演習では、グループワーク、全体発表および討議を行った（表1）。

グループは、施設や所属部署の異なる受講者6から7名で編成した。互いに知り合えるように名札を用意し、落ち着いた雰囲気となるよう、講義と演習が一箇所で受けられる教室を準備した。緊張を緩和し、議論を促進させる目的で、ファシリテーター役の教員を1から2グループに1名配置した。全日程に参加した受講者には、修了書を授与した。

3. 研修修了者との協働

当初、研修会は、大学教員のみで運営でスタートしたが、今回からは前回の研修修了者3名との協働になった。この目的は、修了者の事例を活かし演習内容を受講者の現実に近いものとする、修了者の活躍の場をすること、今年度の受講者の刺激とすることである。さらに、本学と実習施設との交流を深めることも含まれた。

まず、修了者の参加について所属施設の承認を得た。次に、修了者3名と研修責任教員1名および各演習責任教員3名とで、事前の打ち合わせを行った。修了者は、1名ずつ1つの演習運営に参加することとし、演習責任教員とペアを組み、事例を提供した。演習用の事例は、教員と修了者とのやり取りを経て作成された。修了者は、当日の演習にて、事例紹介、グループワークおよび全体討議への参加をした。

表1 臨床実習指導者研修会プログラム

日	分	項目	内容
	20	導入	オリエンテーション、学部長挨拶
一	60	講義	看護を語るとは
日	60	講義	私の看護観
目	180	演習1	看護する上で大切にしていること グループワーク、全体発表・討議
	60	講義	看護学部の臨地実習の概要
二	60	講義	臨地実習における指導者の役割
日	60	講義	効果的な実習指導の方法
目	180	演習2	指導する上で大切にしたいこと グループワーク、全体発表・討議
	60	講義	青年期の心理的な特徴
三	60	講義	本学学生の特徴および傾向
日	60	講義	学生のレディネスの捉え方
目	180	演習3	学生の力を引き出すために グループワーク、全体発表・討議

4. 受講者の概要

受講者は50名（男性1名、女性49名）であった。参加施設は2病院で、A病院から38名、B病院から12名の参加であった。受講者の臨床経験平均年数は14.2年であり、実習指導を経験したことがあるものは11名（22.0%）、ないものは39名（78.0%）であった。

Ⅲ. 演習の実際

1. [演習1] 看護する上で大切にしていること

1) 演習1のねらい

臨地実習は、臨地実習指導者や病棟の看護師の姿から学生が看護を学ぶ貴重な機会である。しかし、看護師は日常の業務の中で自分自身の行動を見直す機会が少ない。学生が受け持ち患者を前にして戸惑い、気持ちが揺れ動きながら実習することを理解するためにも、昨年度と同様に「自分が考えたり感じたりしていることを見直し、今自分がどのような立場で何を見ているのか捉え直すことができる」ことを演習1のねらいとした。

2) 事例の作成と演習の準備

修了者に演習のねらいを踏まえて事例作成を依頼し、提供された事例を共に検討し、受講者の行動目標を「自分の考えの捉え直し」と「自分とは異なる価値を知る」とした。検討手順として受講者に事例を提示し、グループで1事例を選択した後「自分は誰のために何をしたいと考えたか」について事例を読んだ時の率直な気持ちをメモしグループで話し合い、グループの提案とその根拠をまとめ発表した。ファシリテーターには、提示事例のような状況を想定し、受講者自身が抱く思いと気持ちの揺れ動きを観察し、立場を超えて率直な意見交換が十分行われること、提案の根拠を明確に示して発表できるように援助して欲しいと伝えた。

3) 事例の提示

事例1

患者は80代後半の女性。糖尿病、心筋梗塞、大腿部頸部骨折、認知症の既往歴があり、今回は褥瘡の悪化で入院となった。要介護度は5で、50代半ばの息子がいる。息子は疾患に関する理解はあまりない。患者は入院後、食事も徐々にとれなくなってきている。発語はないが、食べたくない食事に関しては顔を背け、時には涙を流す。なかなか食事が進まずターミナル期に入った。嚥下力が低下し誤嚥性肺炎をくり返しており、点滴も入りにくくなっている状況である。息子は時間をかけても食べさせてほしいと言う。本人の食事に対する訴えはない。医師は「できるだけ息子さんの意見も尊重しましょう」という立場をとっている。

事例2

患者は80代後半の男性。慢性閉塞性肺疾患で在宅酸素療法をしており、脳動脈瘤、前立腺癌、慢性心不全の既往歴もある。今回の入院は心不全の増悪である。家族は長男夫婦と孫2人で、主たる介護者は長男の妻、長男とは折り合いが悪い。頑固であるが、孫には優しい。入院時は心不全のために全身浮腫、胸水の貯留、呼吸困難が見られ、利尿剤が開始となった。CO₂ナルコーシスを起こしやすく、SpO₂も変動がある。高齢であるが認知症はない。食止めや入院のストレスのためか夜間せん妄が出現し始め、夜間のナースコールが10分～30分おきとなっている。SpO₂低下があり痰の吸引が必要な状態だが、本人は苦しいと吸引を拒否し、看護師の吸引に抵抗して涙ながらに医師に看護師による吸引の苦しさを訴える。医師はこの患者を長く診療しており、結びつきは強い。医師からはSpO₂が低下しても、本人が希望するとき以外は痰の吸引はしないようにと指示が出た。夜間痰がからんでいる状態やSpO₂低下が見られて

いる中で、どこまで本人の意思を尊重するのか、夜勤時の対応が特に問題になっている。

4) 討議・発表

提示した事例は受講者にとって、日常経験しているような事例であり、患者がその人らしく生きるということについて考えてみたいという理由で各事例を4グループずつ選択した。グループワーク開始時は、各グループとも淡々と事例の看護展開について話し合っていたため、もし提示された事例が自分の家族であったらどうするのか問うと、「看護師の安心・自己満足」「できることがあるのにやらない結果をどう引き受けるか」など、率直な意見が出るようになった。これは、看護過程を構造化していく能力として「対象の立場への変換能力」(戸田・黒田・佐藤, 2006)があげられているように、効果的な実習指導を行なうためには、看護者の立場と実習指導者の立場もその時々によって変換させることが必要であることを示している。この関わりの結果、受講者は自分たちのものの見方の傾向、看護師という立場を離れ家族の一員としての本音、医師と看護師の関係などを率直に検討し、解決方法が話し合われた。

5) 今後の課題

今年度は複数の施設の受講者を受け入れるため、話し合いへの導入がうまく図れるかが課題であった。しかし、昨年度の修了者から研修についての情報が伝達されこの研修を楽しむにしていたという受講者がいたこと、修了者からの提示事例が身近な問題として受講者に受け入れられたことから、和やかな雰囲気話し合いに入ることができた。修了者の参加は、大変効果的だったと思われる。しかし、受講者が自分の思いや考えを見直すことは前述のように難しいことがわかった。ファシリテーターの意図的な関わりのために事前準備が重要である。

2. [演習2] 指導する上で大切にしていること

1) 演習2のねらい

前年度は、患者や学生などの行為の理由を断定し、行為者の意図を十分検討しない傾向が見受けられた。このため、演習2のねらいは、(1)患者と学生にかかわる人物を推定し、それぞれの意図を検討することができる。(2)学生を指導する上で大切にしたいことを多面的に話し合い、指導の可能性に気づくことができる、とした。

2) 事例の作成と演習の準備

修了者の提供事例を基に、演習事例を作成した。話し合いは、まず、「あなたの受け止め」として、感じたことや考えたこと、類似の経験の振り返りを行う。次に、「かかわった人々の意図」として、かかわったと推測される人物をすべて挙げ、それぞれの意図を類推する。最後に、「あなたの願い」として、学生にどのようになってほしいか、学生指導をするうえで大切にしたいこととその実践方法を話し合うこととした。

3) 事例の提示

患者は80歳代の女性。肺炎にて入院。入院前は、杖歩行で身の周りのことを自立してできていた。年相応の物忘れあり、認知症の診断は受けていない。

肺炎治療のため安静臥床を余儀なくされた結果、一時的にADL低下が生じた。このため、リハビリを行い、ポータブルトイレへの移乗が見守りでできるまでに改善した。その頃から、「大丈夫だよ。一人で出来るから」という発言があった。また、夜間せん妄が出現した経緯があったため、睡眠導入剤を眠前に内服している。

学生は2年生で、入院当初から受け持つ。学生は、①移乗時はベッド柵をきちんとつかみ足を床についてから立ち上がる、②移乗する時は必ず看護師を呼ぶように説明する、などの計画を立てていた。受け持ち10日目、

学生が休憩時間より戻ってくると患者はベッドから転落して、頭部に腫瘍ができていた。頭部CT撮影の結果、血腫がないため経過観察となった。患者は、「ちょっととんでいこうと思って」と。看護師は、ベッド横のテレビ台に乗っていたものに手を伸ばして転落した様子、と判断した。

翌日、患者と学生の会話を偶然耳にする。患者は、「少しの距離だからとんでいこうと思って」と話す。学生は、「だめですよ。そんなことしたら、また昨日みたいに転んで頭をぶつかけたりしたら、看護婦さんに怒られちゃいますよ。落ちてからじゃどうしようもないんだから」と言う。患者はうつむいた様子。

4) 討議・発表

(1) かかわったと推測される人物とその意図

推測される人物として挙げたのは、患者、学生、看護師、教員、医師、家族、同室者、理学療法士、師長、看護助手、安全管理室職員などであり、特に、患者、学生、看護師について多く意見が述べられた。

患者が動くに至った意図として挙げられたのは、一人で出来るから大丈夫、自分で動きたい、他人の手を借りずにいたい、などであり、うつむくに至った意図として挙げられたのは、注意されてショック・悲しい、話を聞いてほしいのになどであった。

学生の意図として挙げられたのは、二種類に分かれた。ひとつは、患者への心配、転倒したことのショック、どうしていいかわからなくて「だめ」と言ったなど、再転倒を繰り返したくない気持ちが推察されるものである。もうひとつは、計画が上手く行かなかった、看護師に怒られる、実習の評価が下がる、など自分を守る気持ちが推察されるものであった。

看護師の意図として挙げられたものも、二種類に分かれた。ひとつは、事故となった負担感、学生がいるから大丈夫と思ったのにと、いう後悔、原因をあれこれ考える気持ちなど、

転倒に引き起こされた気持ちである。もうひとつは、看護師を怖い存在とされたショックや驚き、患者の気持ちへの心配、学生がどうしていいのかわからないのではないかという心配など、学生の言動に引き起こされた気持ちであった。

(2) 学生にどのようなようになってほしいか

最も多く述べられたのは、患者を第一に考え、相手の立場に立って気持ちや表情に気づき、言動の理由を受け止めてほしい、であった。次に、「だめ」という否定的な表現、上の立場からの言い方、自己中心的な言い方をせず、どのような言葉をかけたらいいかよく考え、配慮ある言葉でコミュニケーションをとってほしい、などであった。

(3) 学生指導をするうえで大切にしたいこととその実践

大切にしたいことは、学生を否定せず先入観を持たず事実を受け止め、学生の思いを汲み取って一緒に考える姿勢をとりたい、であった。そのための実践は、まず学生の言動の理由を「ソフトに」聞くこと、患者の思いと一緒に考えること、学生とスタッフ皆でよくコミュニケーションをとること、学生の名前と特徴を覚えて個別性のある指導をすることなどが述べられた。

5) 今後の課題

グループワークでは、「『看護師さんに怒られちゃいますよ』は、自分たちの日頃の言動を反映しているのか、もしそうならショック」など率直な感情が表現され、本音を語り共有できていた。討議では、患者を第一に考える学生になってほしい、指導者として学生の行動の理由を尋ね、一緒に考える姿勢をもちたいなど述べられ、十分な話し合いが行われたと考察できる。事例提供をした修了者は、様々な意見が非常に参考になったと述べた。

3. [演習3] 学生の力を引き出すために

1) 演習3のねらい

演習3「学生の力を引き出すために」のねらいは、以下の3点とした：(1) 受講者が学生の立場にたち、事例の状況を把握できる。(2) 学生が患者の立場で対象を理解する力を育成することの重要性について、受講者が話し合い考えることができる。(3) 学生が患者の立場にたった支援計画を立てられるよう指導者としてあり方を考える。

2) 事例の作成と演習の準備

演習3で用いる事例は、上記のねらいを基に、主に修了者が作成し受講者用に教員が加筆して作成した。事例は3事例からの選択制にした。これは、より考えやすい事例を選ぶので選択制にしたいという昨年度の修了者の意見を反映したためである。

話し合いは、3事例のうち1事例を選び、司会者、記録者、発表者を決め、事例を読んだ感想を述べることからはじめた。次に、演習のねらいが達成できるような話し合いのテーマに沿って議論していった。(1) 学生はどのような考え(思い)で、事例のような行動をとっているのか考えてみよう。(2) 臨床実習指導者のあなたは、学生にどのように患者に関わってほしいと思うか。(3) 学生が患者の立場にたち根拠ある看護計画・支援ができるために、指導者としての具体的な関わり方を考えてみよう、の順に話し合いをすすめることとした。

3) 事例の提示

以下の3事例を提供し、グループのファシリテーターには、次の事項を留意点として申し合わせた。(1) 受講者は学生の立場を考えると患者の立場を考えにくくなり、患者の立場を考えると学生の立場を考えにくくなる傾向があるため、どちらかに偏り支障をきたすようなら助言してほしい。(2) 事例は指導者の立場からみた表現になっている。必ずしもその見方が正しいとは限らないことを留意す

る。(3) 演習のねらいから外れなければ、話し合いの内容や方向は、グループに任せる。事例の解釈の多様性や、多様な関わり方を自由に出してかまわない、の3点である。

事 例

事例1「おいしかった食事？」

80歳代女性胃がんの患者 保存的にて積極的治療はしない方針。食事は1/3量で食欲なし。ある時、学生が「たくさん食べないと帰れませんよ！」と無理やり食塊を口に挿入する。その後、学生は患者の「おいしかった」という言葉が聴かれたことでよい評価をする。

事例2「何にもできない？」

70歳代男性胃がんの患者 積極的治療せず、狭窄部にステント留置して退院の運びの方向。学生が清拭等の日常生活支援の援助計画を立て患者に促すが、倦怠感強くことごとく拒否される。学生は何もできず立ちすくんでいる。

事例3「パンフレットのチェック…」

80歳代男性すい臓がんの患者 患者が退院後も麻薬内服を間違えずに自宅で実施できるように、学生がパンフレットを用いて退院指導を計画した。明日の退院を控え、学生は作成したパンフレットを臨床実習指導者にチェックしてもらおうと声をかけた。臨床実習指導者は、学生に「あなたがパンフレットを作ったのは、患者さんとの間でどんなやり取りがあったからなの？」と根拠を聞いたところ、学生は「そんなことしていません」と言った。

4) 討議・発表

事例1を選択したグループは、3グループ、事例2を選択したのは3グループ、事例3を選択したのは2グループであった。以下では、グループワークの流れに沿って、受講者が討議した内容を報告する。

(1) 学生の行動に関する考えや思い

受講者は、学生が「患者に何かしたい、と

にかく良くなってほしいという純粋な気持ちを持っている」と語っていた。しかし、一方で、この気持ちが強すぎて、「何かしなくちゃいけない」という使命感、何かしないと「指導者や教員からの評価が心配」という面もあると語っていた。事例3では、事例1・2に比べ、この後者の意見が強く語られていたことが特徴的であった。

(2) 患者の思い

患者の思いについては、議題として挙げなかったが、事例1の2つのグループで患者の思いを話し合っていた。「患者は食欲なくて当たり前だと思う」食欲はないが「学生が頑張っているからその思いにこたえようとおもしろかったと言ったのでないか」「患者は学生さんが可愛いと思っている」などと患者の立場や、身体的・精神的な状況、患者の学生に対する思いなどを、事例の患者の発言から予想していた。

(3) 学生にどのように患者にかかわってほしいか (指導者の思い)

どの事例も、患者をよく知ってほしいという話し合いがなされていた。事例1・2では、患者の立場に立ってほしい、患者の気持ちなどが多く、患者の思いを考えたグループでは、患者の思いに偏り学生への要望が強く出る傾向であった。事例3では、根拠を持って患者とかかわってほしい、何が必要なのかアセスメントしてほしいというケアの根拠に関する語りが多かった。

(4) いかに指導者として具体的にかかわるか

事例1・2では、「失敗してもいい、評価を気にせず実習させたい」「学生の答えを待つ」「どうすればいいのか一緒に考える」などの意見と、患者に何が必要なのか、何を計画したらよいかなど、看護計画の見直しを中心に声かけをしていくという意見が見られた。事例3では、事例1・2で見られた意見の両者があったが、パンフレットづくりの根拠に焦点がしぼられていた。

5) 今後の課題

グループ討議の議題で、患者の思いを確認することは、指導者として学生にいかにかかわるべきかを考える上で必要かもしれない。たとえば、倫理的課題に直面した際にその意思決定を援助するために用いられるモデルでは、登場人物のそれぞれの思いを確認するところから始まる(小西, 2007)。登場人物の立場に立って考えることは、その後の行動の選択に影響を与えるからである。しかし、今回の演習では、登場人物の思いをそれぞれ確認するという話し合いの進め方ではなかったこと、次の話題が学生に患者にどうかわってほしいかという内容だったため、学生への要望に焦点が進んでしまったと思われる。登場人物の立場を考えることができる演習づくりが今後の課題として残された。

今回の3事例は、実際に臨床実習指導者として経験のある修了者が作成したことで、より現実的な事例となった。3つの事例を比較すると、事例3は、事例1・2に比べ、学生の立場に立って考えにくいことが分かる。しかし、看護ケアの一つ一つに根拠があることを学生に気づいてもらうためには、事例3は焦点がしぼられており、議論しやすかったのではないだろうか。遭遇しやすい事例を修了者とともに協働して考え、展開して行くことは、ねらいに応じた事例づくりに発展できると考えられた。

IV. 研修会の評価および課題

研修会の成果を明らかにするために、研修会の評価を実施した。

1. 調査方法

臨床実習指導者研修の調査票は、前回の研修で丸山・安部・梨本他(2006)の臨地実習指導者研修会開催報告を参考に作成したものを、一部改変した。改変点は、日々の研修目

標に沿って、気付いたことを自由に記載できる項目を2つ設けた。1つは、どんな看護を学生に伝えたいか、もう1つは、研修を通して思い出した印象に残っている学生や実習指導についてである。この調査票は、所属機関の研究倫理審査委員会で承認されている。調査にあたっては、受講者に書面を用いて調査の趣旨を説明し、回答をもって調査への同意とみなした。なお、調査票は、受講者の回答時間を十分にとるために、研修会初日終了時に配布し、最終日に回収箱を用いて回収した。

2. 結果

調査票は、受講者50名に配布し、48名(96%)より回答を得た(表2)。自由記載は48名中44名の回答があった。研修の評価につながるものを抽出し、意味の通った簡単な文章にして、類似しているものをまとめて表題(【 】に記載)をつけた(表3)。

1) 研修会の方法

1日の時間配分や学習量、研修日数は90%以上の回答者が、開催時期は80%の回答者が、適切と返答していた。

2) 研修会の内容

内容に関する設問への回答と自由記載のまとめから述べる。

【指導方法のとらえ直し】に関しては、過去の振り返りを基に、学生はできなくても当たり前で、視点を変えて見守っていきたい、学生の持てる力を引き出したいという内容があった。受講者は、講義や演習を通して、過去の指導経験を思い出しながら、学生の立場になって考え直して、学生を理解しようとしていたといえる。3日目の講義は、大変参考になったと回答した受講者が50%に及んだことから、受講者のニーズにあう内容であったと考えられる。

【大切な点の再確認】に関しては、患者の立場を考えられるようになってほしいという

表2 臨床実習指導者研修会の方法及び内容への評価

N=48

研修会の方法	適切	やや適切	やや不適切	不適切	無回答
開催日時	9(18.7%)	30(62.5%)	7(14.5%)		2(4.1%)
時間配分	16(33.3%)	30(62.5%)	1(2.0%)		1(2.0%)
学習する量	15(31.2%)	30(62.5%)	1(2.0%)		2(4.1%)
研修会の日数	13(27.0%)	30(62.5%)	3(6.2%)		2(4.1%)
研修会の内容	大変参考になった	参考になった	参考に ならなかった	全く参考に ならなかった	無回答
看護を語るとは	16(33.3%)	30(62.5%)	1(2.0%)		1(2.0%)
私の看護観	18(37.5%)	28(58.3%)	1(2.0%)		1(2.0%)
【演習1】看護する上で大切にしていること	25(52.0%)	20(41.6%)	2(4.1%)		1(2.0%)
臨地実習の概要	1(2.0%)	33(68.7%)	12(25%)	2(4.1%)	
指導者の役割	15(31.2%)	32(66.6%)	1(2.0%)		
実習指導の方法	25(52.0%)	23(47.9%)			
【演習2】指導する上で大切にしていること	27(56.2%)	21(43.7%)			
青年期の心理的特徴	28(58.3%)	20(41.6%)			
本学学生の特徴・傾向	23(47.9%)	25(52.0%)			
学生のレディネスの捉え方	25(52.0%)	23(47.9%)			
【演習3】学生の力を引き出すために	20(41.6%)	23(47.9%)			5(10.4%)
総合満足度	大変満足である	満足である	不満足である	非常に 不満足である	無回答
	17(35.4%)	26(54.1%)			5(10.4%)

表3 研修を受けて気づいたこと

(44名:複数回答)

指導方法の とらえ直し	<p>新人になかなか仕事を覚えてもらえず、ついNG(No Good)ワードを口にしてしまい、良い関係が築けずにはいけなかったと気付いた。学生や新人はできなくて当たり前で、視点を大きく変えて見守らなくてはならないと分かった</p> <p>患者を守りながら指導していると、事故の予防を優先させてしまいがちだった。見守りながら学生が持っている力を引き出したい</p> <p>自分の指導は根拠の上に成り立っていなかった。そのときの自分の状況や感情で指導していたと反省し申し訳ない気持ちになった</p> <p>学生が患者の処置で失敗をした時、すぐく腹が立ち怒ってしまったことを謝りたいと思った。色々な経験が増えたり、いろいろな人と関わる中で自分も成長すると思った</p> <p>新人・学生を知る良い機会になった</p> <p>私の学生時代と比べて、とても大事にオブラートに包まれたような指導が必要なんだと思った</p>
大切な点の再確認	<p>患者様のことを一番に考えることができる学生になるよう伝えていきたい</p> <p>実習では技術を習得することよりも、人との関わりの中で湧き上がる自分のさまざまな感情や相手の気持ちを大切にできる人になってもらいたいと感じた。学生がそのような関わりをできるように指導していきたい</p> <p>学生と共に考え、学生が自ら答えを出せるように導きたい</p>
自然体の指導姿勢	<p>学生は学生なりの看護の視点があることを思い出した。学生が学びやすい雰囲気を作ることや学生から学ぶことがあることを改めて考えた</p> <p>学生指導で、つい肩に力が入って、良いところを見せなくてはとか間違っただけを教えるのはいけないと思っていたが、ありのままの姿を見てもらえばいいとわかった。もちろん、日々勉強していきたい</p> <p>皆、完璧ではないこと、いつまでたっても日々悩み、考え、ケアしていること、その中で喜び、楽しみ、生き甲斐があることを伝えたい</p> <p>臨床も試行錯誤しながら看護していることを伝えたい</p>
話し合うことでの 成果	<p>事例検討はとても参考になるので、これからも事例を提供してほしい</p> <p>何でも本音で答えを出さずにみんなで話し合うことの大切さが分かった。気が楽になり、無口な私でも意見が出せた。他の意見も参考になり、考えがふくらみ、とても勉強になった</p> <p>みんないきいきとしており、前向きな姿勢に感心し、とても刺激になった</p> <p>事例のような何もできない学生を指導した経験がある。みんなと事例を通して話し合い、指導のあり方、看護観の振り返りができた。自分の学びになり、本当に楽しい研修だった。今後もこのような研修を続けてほしい</p>

願いや、人との関わりで湧き上がる感情や相手への気持ちを大切にしてもらいたいとする記述があった。

【自然体の指導姿勢】に関しては、その人なりの看護観を持つ学生から学ぶ姿勢、実習でよい看護を見せなくてはいけないと実習指導を重荷に感じていたが、臨床で実施しているありのままの看護を見せること、試行錯誤の姿を示すこと、などを通して学んでもらえば良いのだと安心できたとする記載があった。

【話し合うことでの成果】に関しては、本音で話し合う大切さ、考えの広がり、受講者の前向きな姿勢からの刺激、などの記述があった。

3) 総合評価

3日間を通して、90%の回答者が総合満足度で満足と答えていた。演習では、グループワークを同一のメンバーで3日間行った。2施設の受講者で成るグループにも関わらず、施設間の隔たりを感じさせず、他施設の看護師と関わる喜びが伝わってきた。初日はお互

いの様子を探る印象があったが、2日目は顔を突き合わせて少し砕けた言葉で、笑顔で話し合う姿が見られた。3日目になると、発言に大きな身振り手振りを交えて同意したり、自分の意見を伝えたりする姿が目立つようになった。受講者は、正解を求めずに自由に自分の意見を話すことを通して、自分の意見を伝えられた喜びと、他の人の意見を聞き考えが深まる体験をしていた。

修了者からの事例提供とその検討に関しては、参考になるのでこれからも事例を提供してほしいという内容があった。修了者の指導経験を基に作成された事例は、受講者に親近感や現実味をもたらしたと考えられる。さらに、修了者には、過去の学生指導で悩んだ体験を、そのままにせずに、再度振り返り、指導方法を考えるきっかけになったと考える。

この研修会は、大学教員の講義と、修了者の提供事例に基づく演習との組み合わせで実施された。また、演習にはファシリテーター役の教員と、事例提供の修了者が参加し、学

生理解や現場の理解を深められるよう協働した。このため、事例を多面的に理解し、実習指導について検討できるプログラムになっていたと評価できる。

4) 今後の課題

受講者の記載内容には、学生に考えさせたい、学生の力を引き出したい、学生と看護を話し合いたい、学生に看護の良さを伝えたいという学生指導に関わる熱意が表現されていた。この熱意と実際の日々の取り組みを言葉にして、自信につなげるような研修内容を検討することが課題と考える。

例えば、他施設の研修会の報告(佐藤, 2003)は、研修修了者が受講者に自身の指導過程を具体的に語り、質疑応答をする場を設け、修了者にも受講者にも意義があったとしている。今後は、修了者と受講者のやりとりを増すプログラムを検討する余地があるかと考えられる。

V. おわりに

本研修会は三日間のプログラムで、1日ごとの主題を「看護観」「指導観」「学習者観」としている。受講者は、本研修を受けて、【指導方法のとらえ直し】【大切な点の再確認】【自然体の指導姿勢】【話し合うことでの成果】に気づくことができたとしている。研修の目標にそった成果が得られたと評価できる。

研修修了者と協働して開催することは、受講者・修了者・教員にとって意味深い経験となった。身近な修了者の活躍に触れることは、

学習者である受講者がメンターを得る機会や、今後の実践へのヒントを得る可能性をもたらしたと評価できる。

謝辞

研修修了者の小平直人さん・菊池由香さん・出野賀恵さん、および所属施設の看護部と病棟の皆様に、深くお礼を申し上げます。

文献

小村三千代・橋本佳美・水野照美・宮崎紀枝・吉岡恵・高橋香里(2009). 平成20年度臨床実習指導者研修会の実践報告. 佐久大学看護研究雑誌, 1(1), 27-36.

小西恵美子編. 看護倫理(2007). 良い看護・良い看護師への道しるべ. 南江堂, 東京.

丸山敬子・阿部明美・梨本光枝・下山博子・阿部勝子・石山香織・他(2006). 新設看護学科における平成18年度第1回臨地実習指導者研修会開催報告. 新潟医療福祉大学誌, 6(1), 108-113.

佐藤淑子・戸田肇(2003). 看護観の再構築と実習指導者像の形成を目指した研修会の実施とその評価—平成13年度～平成14年度に開催した「交流会」を通して—. 北里看護学誌, 5(1), 49-54.

戸田肇・黒田るみ・佐藤淑子(2006). 看護観の再構成と実習指導者像の形成を目指した研修会の実施とその総括的評価. 北里看護学誌, 8(1), 67-70.